

會



報

1963年6月

227

日本山岳会

半世紀前の剣岳登山

河合良成

登山の動機

わたくしが剣岳に登りましたのは、いまから五十四年ほど前、約半世紀前ですが、その二年前に参謀本部の陸地測量部の柴崎測量官が登ったということです。その翌年はだれも登りませんで、翌々年、即ち明治四十二年にわたくしども一行が登ったのです。

どうして、そんなときに登ったかといえますと、わたくしは富山県の福光町で生まれまして、育ったのが伏木港です。その伏木の古国府という高いところに家がありましたので、朝晩、立山をにらんでいるわけです。その本峰の向って左のほうに高くそびえている剣これが前人未踏だということで、弘法大師がわらじ千足も費やしても登れなかったという伝説があるのです。そして伊折谷というところに白い布のような雪渓が中腹から八合目ぐらいいまでおりまして、これは四五度以内だから行ける。そのあとは岩伝いに登っていけばいけるものだと思って、十数年間も朝晩ながめていたわけですから、私は立山には何回もい

ったもんだから立山連峯は私には奥行が見える、立体的に見える。雪のあした、雨の夕べというふう

に眺めているから奥行がわかるんです。そういう子供心と、もう一つはアドベンチャーですね。近代人はアドベンチャーがなくな

ったが、これを失なうと民族が滅びる。

そういう気持で、いっぺん登りたい登りたいとにらんでいるところへ、明治四十年の夏、柴崎氏が登ったということが新聞にでまして、なんだか恋人を奪われたような気持もしたが、とにかく、それじゃあ、あとを追って登ろうということになったわけです。四十年のときには頂上から僧侶の使う錫杖の頭を持ってきたそうです。やはり名僧と申しますか、りっぱな人がそこで座禅でも組んで入寂したんじゃないかと思うわけです。

明治四十一年は事情があって、四十二年七月、このとき私は東京大学在学中の二十三才の学生でしたが、いろいろ研究して計画を立てた。母にはそんなことをいうと気でも狂ったのではないかと、いわれるに違いないので、申しわけ

ないが、立山へ行ってくることにしまして、同行四人、ひとりとは石崎光瑠という画家で、この人はあとで竹内栖鳳の高弟になり、これから登山病というほどの愛好者になり、印度へ行つてヒマラヤの熱国研シなどという名画をかきました。それに吉田孫四郎、野村義重と云う同郷の東大学生でした。三人とも今はもう亡くなっております。この機会に心の中で冥福を祈らせていただきます。

原始的登山

当時、ピッケルのような高尙なものはない。七尺ばかりのトビロをこえさせまして、テントの代りに油紙をうんと持って行く。金カンジキだけはまがりなりに作らせ、代価は四人分で壹円三十五銭を出したことが日記ののっている。そしてザイルのかわりに細引き、米、味噌、かつお節、パン等三日分ぐらい持ちまして、立山室堂で鍋を借りて担いで行くという本当に原始的な登山でした。

もちろん、この頃から日本アルプスは段々人が登りました。しかし、それはウエストン、チェンバレンなどの初期の時代から間もない頃で、志村烏嶺さんなんか、雲ノ平にいったら頭がボーッとしてしまったという様な登山の時期

です。

そういう用意をいたしまして、案内人としては四十年に登った宇治長次郎——これは有名な人夫になりました。それに立村常次郎、佐々木浅次郎の三人を連れましたが、その時の賃金は日記によると食事はこちら持ちで、長次郎には一日一元、あとの二人は九十銭でした。

元来私は、登山には自信を持っておったのです。というのは、中学に通うのに一里半か二里の道を毎日草鞋ばきで往復したものです。そのうち汽車ができましたが、汽車馬車といつて軽蔑し、汽車のあとを追っかけて、追っかけきれなくなると、れんげ草の咲いている田圃の中であらうという訳で、足と心臓がばかに強くなつてしまつて、剣登山の前年には郷里を出て浅間、富士に登り、それから群馬へ来て前橋を朝たつて、清水峠を越して翌日の正午まで歩きつづけて越後の長岡についたことがあつた。金がなくなつてしまつて、とうとう友人のところへ辿りついた訳です。友人は非常に喜んでくれ私のテニスが好きなことを知っているのでテニスをやれと云う。私はわらじの俣でテニスをやるのと、ラケットと球が離れて動いたことを覚えてる。(次頁へ)

室堂から沢へ

七月二十一日立山温泉へ着いて翌日立山室堂へ行き、「これから剣にいく」というと、「そんなばかな奴があるか」と叱られました。が、私は翌朝早く発って、今のスキーなぞやる雷鳥沢を登って別山の裏へグーツと大雪渓を下りました。これは白馬の雪渓よりもはるかに大きな雪渓です。そして霧の中を奈落の底を下だるようにして、この雪渓がそろそろ左からくる折立川と合うところに露营地を求めました。これは勿論、木の枝や草で屋根を急にこしらえたもので、白樺の生木を切ってきて一晩中焚いている訳です。ところが、この露営の近くで吉野桜が咲いている。それから、大葉黄スミレの誠にきれいな群落がありました。それ等を取ってアルミニウムのコップに生けたりして、竹の子、とげのない山あざみ、山うど等持ってきました、みそ汁をこしらえる。なかなか山の珍味ともなるとなんとはいえんもんです。

それから二晩中火をたいて寝る。七月二十三日朝の四時四十分に出発しました。露营地に不要のものは残して置きましたが、一番邪魔になるものは財布です。イの一番に天井に釣って行きました。

長次郎谷、熊ノ岩の命名

昨日来た路をちょっともどりまして、そして第一の右の谷を登りました。長次郎が「一昨年私がここから登りました」というから、お前の名譽のために「長次郎谷」としようということで、長次郎谷と命名しました。長之助草という高山植物がありますが、それにも似ておりますし、長次郎なかなか



右壁を伝って雪渓へ入る 石崎光瑤

左の股と私共の名つけましたその分れ道にくると、右の股の前方に大位の大ききのやつがある。「あれは何だ」というと、人夫は「クマ」というんです。「こちらへ来たかどうか」と聞くと、「にげるより仕方がありません」という。そのうちに一番勇敢な長次郎が雪の上でしこを踏んで「上へまわれ、下から追い上げ、ウオー」という調子でクマ追節をやり出す

愉快な男だったからです。

長次郎谷を登るときに、まだ朝ですから雪がカチカチでトビ口が入らんくらいでした。熊を追うのに、「ソーマ」の掛声（杓の掛声の意か）をやりました。「オーオ、オッホ」という調子の掛け声です。そして、だんだんと雪渓の三〇度ぐらいのところを登っていく。

約三、四十分も登って、右の股

蟹の横ばい、危い岩場

と命名するかを相談した。たまたま私は、当時アメリカから輸入の五円もする大事な万年筆をその岩と雪の間に落としてしまったので（今もそのままあると思う）万年岩とつけようか、というところ「それもいいが、クマに会ったし、一寸熊に似ているから熊ノ岩とつけよう」ということで衆議一決、皆さん御存じの熊ノ岩となったのです

だんだん雪渓が急勾配になり、ところどころクレバスが出来て居るのです。切れ目が帯のようになって梯子でもなくては渡れぬので右側の岩を蟹のようになって匍うて行きました。恐らく今の八峰の一部だと思えます。それから再び雪渓へ出て、全員を細引でつなぎひとりが滑べるとひとりがトビ口を打込んでいくという調子で、みんなが急峻な斜面を作りつつ登っていきまして、とうとう大きな岩山にとっつきました。今その岩山がどうなっていますか、剣呑なところで、今でも一番ゾッとするのは、岩鼻を抱いて回る。下は千仞の谷で霧が湧いている。石崎君が画家であって運動神経がないもんだから、細引きを両方から引っぱって、いろいろな苦心したことを今でも覚えております。

昭和三十八年六月十五日

第六回有志閑談会

駒込六義園 心泉亭

◎出席者（五十音順）

青木 昇、足立源一郎、網倉志朗、今井雄二、太田 敬、小野利次、織内信彦、交野武一、加藤泰安、金坂一郎、神谷 恭、冠 松次郎、坂倉登喜子、桜井信雄、佐藤久一朗、佐藤隆太郎、島田 翼、関根吉郎、高木菊三郎、田口三郎助、田部重治、鳥山徳成、中村 謙、中村清太郎、牧野 衛、松方三郎、松本熊次郎、村井米子、望月達夫、原田幹市、日高信六郎、深田久弥、藤島敏男、山崎安治、山下一夫（世話人）野口末延、瀬名貞利、古沢 肇

今年も梅雨の中休みを覗いて、有志閑談会が開かれた。当日はくもり空で、照りつけることもなく、名園の翠緑は滴るばかりに美しい。都座を離れた気になって悠然と泉水を一人占めにした気分になれるのもこの会場の一徳であらう。今年はどうしたわけか泰山木の花が咲き揃わぬのは惜しかった。

年とともにますますお元気な長老方のお顔も揃ったところで芝生に出て記念撮影、定刻からビールで乾杯のち会食、例によつてこの会ならではのお話は、まず冠さんからはじめられ、遠い明治の東京の思い出、つづいて中村さん、

岩場の危いところをいろいろ苦心して登り、八時三十分に頂上に着きました。露营地から約四時間でした。頂上に着いた時の感想はなんとも説明のしようがない。どうしても登りたいと思っていた山だものだから、残っている日記にはただ「涙出づ」と書いてある

頂上の様子

頂上の様子は、長次郎が一昨年



当時の手帳のスケッチから、13×11 cm

かついで来て立てた天然木の皮をとったような棒が一本立って、それが針金で支えてあるところの三角台がそこに立っているのです。これはわたしが一人でかついで来て立てたんだ、と長次郎がいつていました。多分その年になんべも剣へ登ったのだが、第一日が長次郎だけで、あとから柴崎測量官などもお登りになったんだと思います。

頂上に小さい洞穴があって、どうやら一人で雨ぐらいいしのげようかという程度のもが自然にあって、その中に私共は刀の折れ屑の錆たものと、それにたき火の跡があった。炭素だからいつまでも消えない訳です。もう一つは銀鉱石らしいものが一つありました。

私はそれを持ってきて、しまっておいたのですが、先日探したところ、どうしても見付からない。

現在あるものは、当時の写真とその時の日記帳だけです。

私共は頂上にゆっくり一時間か二時間おりました。四方の立派な景色を眺めて感慨無量という訳です。そのうちに四方の山々から雲が起きて、帰路につき、熊ノ岩で午睡をとり、三時過ぎに露营地に着きました。その晩は露营地で泊りまして、翌日別山裏の雪渓を登りました。別山裏というのは剣沢ですね。この名前は私達がつけたのか、その時ついていたのか記憶がありません。それと逆に下ると、剣の大滝に行く道になり、黒部に入るところになり

ます。

もとの道を登りまして、立山の室堂に着きました。ここで「今剣に登ってきた」というたがだれも信じない。いいかげんな事をいっているという調子で扱かれたことを今でも覚えております。

こんな近い山をなぜ今まで登らなかったか

放送時間がまだ少しあるので、剣に関連して御話を致しますが、どうしてああいふ山をだれも登らなかったか、ということをおはその後何十年間も考えてをりますかどうも判断ができません。

これは山ばかりでなく、そんなことが世の中には多いんじゃないか。結局、それを打破するのはひとは「勇氣」です。もうひとつは、「創意工夫」というか、アドベンチャーというか、そういう精神です。そしてその精神がなくては世の中は進歩せんと思う。近頃山の犠牲者が多い。勿論これは甚だ気の毒なことではあるが、一方やはり積極的な考えを青年に持たせなくちゃいかん、というふうに考える次第です。

人間は世界を幾つか持て

結局、高い山というものは人間に未だ汚されていない本当の自然のままなんです。これに人間は接

したほうがいいと思う。そして人間に深味をこさえる。そういう意味において、私もその時分から非常に登山が好きになりました。全国の山々をたいてい歩きました。

それから外国に旅行する時にもなによりもスイツルにいて、ユングフラウ、マッターホーンなどに行き、日本では霧が去来して、残雪の深い、その上に高山植物が絢爛と咲いている様子を見ると、世の中にも生まれてきたかがあると思うのです。私は今日でも庭一杯を高山園にして楽しんでる。私はそれだからいうんです「本当の山を知っている人は世界を二つ持っている」と……。人間の世界と山の世界ですね。人間に生まれた以上は、私みたいに長生きすることと体が非常に結構なんです、その上に世界をいくつも持つことがよい。芸術の世界、哲学の世界、科学の世界、山の世界、というふうを持つことが、人間として最も有意義な人生を送ることができるんじゃないかと思えます。

(編者付記)

本稿は、本年四月一日、NHKラジオ、第一趣味の手帳の時間に放送されたものを河合氏・NHKの了解を得て採録したもの。紙面の都合で終りの部分「青年にアドベンチャーを」を省略しました。

田部さんと、それぞれ山岳会五十年の歴史をいまに引き戻して、おどろくほど鮮明に、またある部分はガラス板に描かれた幻灯の絵をのぞくような楽しい話をされた。この日熱海から上京出席された島山さんは日常の悠々たる心境を淡々とのべられた。

古い山岳測量の話をされた高木さん、こんど東京に戻って来られた望月さん、そして終りを藤島さんと松方さんをお願いしてしめくくりをしていただいた。

この日の話は交野さんのテープに録音したので、いづれ活字にして会報に再現したいと思う。

本会も年を追って盛大になって行くが、定員三十名の席のために、毎回世話人は喜んだり心配したりしなければならぬ。

なお今回の世話人は青木昇、島田興、望月達夫の三氏におねがいました。

本号目次

- ・半世紀前の剣岳登山……………一
- ・第六回有志懇談会……………二
- ・米国エヴエレスト隊の成果……………四
- ・二四回(現地)小集会……………四
- ・秩父宮記念学術賞授賞式……………六
- ・ヒマラヤ蝶蛾調査隊……………六
- ・銀山平の重太郎……………七
- ・一九六三年度通常会員総会……………八
- ・一九六三年度東京支部総会……………八
- ◆図書紹介……………一〇
- ◆会務報告……………一〇
- ◆会員通信……………一二
- ◆東海支部報告……………一四
- ◆関西支部報告……………一四
- ・昭和37年度登山技術研究会……………一四

米国エヴェレスト隊 の 成 果

☆
山 崎 安 治

一九六三年米国エヴェレスト登山隊は、三回にわたって頂上を極め、五名の隊員と一名のシェルパが頂上に立ち、しかも登攀不可能といわれていた西山稜から初登頂に成功し、さらに東南山稜への横断を記録するなど、世界の登山史上に輝しい一ページを加えた。

遠征費三十二万六千ドルという大規模な今回の米国隊で、登山以外に注目を集めたのはその科学調査であった。スポンサーである米国地学協会々長M・B・グロスベナー博士は、今回の米国隊の研究の成果は、米宇宙計画の一環として、宇宙における人類の諸問題の解明に役立つものと期待し、隊員たちはエヴェレストの凍結した斜面で、宇宙探検カプセルで分離された小グループのごとく、異常な環境のもとに置かれ困難な任務を遂行するのであり、その科学実験は次の七つの部分にわけて行な

われると説明している。

- 一、人間の行動における過度の緊張と興奮に関する調査
- 二、緊張下のグループにおける会話の研究。軽量のテーパー・レコーダーを使用し登山中の隊員の会話と討論を記録する
- 三、心理学的研究。心理的限界を越えた際における反応の実験

四、氷河学上の研究

五、氷河の層からのトリチウム（重水素の一種）の存在の調査

六、二万フィートから二万六千フィートにおける太陽放射線の測定

七、全隊員による気象観測

ノーマン・G・ディレンフルトを隊長とする十九名の隊は（隊員の氏名については会報二二五号吉沢一郎氏「アメリカ山岳会ニューズ」参照）二月二十日シェルパ三十名、二十五トンの荷物を九百名のポーターに背負わせてカトマンズを出発した。三月二十四日クレーンブ氷河上一七、〇〇〇フィート付近でベイス・キャンプへのルートが崩壊し、ジョン・ブライテンバツハ隊員が死亡するという事故にあったが計画を続行。一七、八〇〇フィートにベイス・キャンプ。クレーンブ・アイスフォールの上部に前進ベイス・キャンプ。第四キャンプは二四、八〇〇フィート。ローツエ・フェースを登りきった

サウス・コルの二六、〇〇〇フィートに第五キャンプを進めた。

四月三十日、第一登攀隊員ジェームス・ワイテッカー（レニヤ国立公園ガイド、三十二才）とシェルのパワ・ゴンブ（一九六〇年インド・エヴェレスト登攀隊員、テンジン・ノルケイの甥、二十九才）の二名は、ディレンフルト隊長、彼の永年の個人的ガイドをつとめてきた、アン・ダウ四号および八名のシェルパにサポートされサウス・コルの第五キャンプを出発、東南山稜二七、四〇〇フィートに最後の第六キャンプを建設した。

五月一日、ワイテッカーとゴンブ、およびディレンフルトとアン・ダウ四号は強風について第六キャンプを午前六時三十分に出発。ディレンフルトとアン・ダウ四号は二八、一〇〇フィートの地点まで同行して引返した。南峰頂上着十一時三十分、午後一時頂上に立った。気温は華氏零下三十度。すさまじい風が吹まわっていたが雲に覆われた東方を除いて各方面が眺められた。チベット側のロンブク氷河や、ロンブク僧院もはるかに望まれ、頂上には三十分滞在し、星条旗とネパールの国旗を立てた。写真を取り、証拠としてアルミニウム製のボールに星条旗をゆわえて下山したが、頂上には一九六〇年北方から登った中共隊が残したという毛沢東の像も、

これまで登った隊の残したものは何も見当らなかった。下山にかかる雪が降りはじめたが、元気にサポート隊にむかえられサウス・コルに下る。サウス・コルのキャンプにはもし第一隊が失敗したらハリー・ビショップ、ルーサー・ジャースタッド、リチャード・ポウナル、それにシェルのパワ・ミ・ドルジェが再攀をはかる予定になっていたが、第一隊の成功により、第二次の計画に移るため全員ベイス・キャンプまで引き上げた。

五月に満四十五才になったディレンフルト隊長が最高キャンプまで登り二八、一〇〇フィートまでサポートしたことは注目される。彼は高度の影響で喉をからしてしまったが元気にベイス・キャンプで「強風と寒気についての成功はまさに一つのミラクルであった」と述べていた。

第二次の計画は未登の西山稜に登り、東南山稜への横断、および東南山稜からの再度の登攀を行ない頂上で両隊合流するという破天荒なものであった。西山稜はウイリアム・アンソールド、トーマス・ホーンベイン、リチャード・エマールソン、ジェームス・コーベットとなつて行なうことになり、五月六日二名が十二名のシェルパを伴ない西山稜へ先発した。五月十日暖気が襲来し、雪崩の危険が増大

☆☆☆☆☆☆☆☆

第二二四回（現地）
小集会報告
——秋田駒ヶ岳——
日本山岳会
秋田支部

☆☆☆☆☆☆☆☆

第二二四回小集会（現地）は、四月六日（土）、七日（日）の二日間、秋田県仙北郡田沢湖町、田沢高原温泉「こまき荘」及び秋田駒ヶ岳において開催しました。第一日の会場、国民宿舎「こまき荘」は、標高約六六〇メートルの地点にあり、春とはいえ周辺ではまだスキーを楽しめる残雪の量で、先着の野口さん、村井さん、吉田さんは早速スキーをかついで出かけたくらいでした。

六日受付を終ってから各室にて懇談、午後七時半から秋田名物、「きりたんぼ」を食べる準備をしながらつぎの次第で始めました。一、開会のことは、二、荒巻秋田支部長あいさつ、三、秋田県観光課長あいさつ、四、田沢湖町長あいさつ、五、石原東京支部長あいさつ、このあと食べごろになった「きりたんぼ」をつつきながら秋田銘酒を酌みかわしつつ自己紹介を終って懇談に入る。

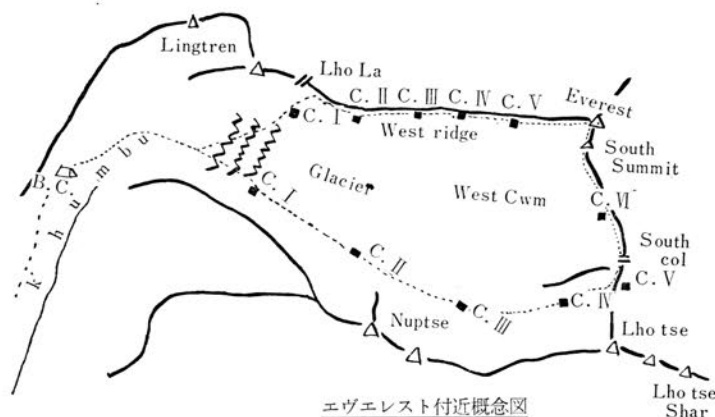
この間、地元田沢湖町民謡保存会のメンバーによる民謡と、秋田オバコによる踊りが披露されヤンヤの拍手があった。

懇談はいつ果てるともなくな

する。

五月十二日、サウス・コルからの第二登攀隊員ビショップとジャースタッドがベース・キャンプを出発した。その間西山稜隊は二二、五〇〇フィートに進進ベース・キャンプを建設。西山稜の登攀については、四月十三日ビショップらによってくまなく偵察がなされたが、補給困難のため、一カ月以上攻撃が延期されていたのだ。

五月十七日、西山稜隊は二五、一〇〇フィートの第四キャンプで暴風雪に見舞われた。風は時速八十マイルにおよぶさまじいものであった。オウテンとコーベットのテントと四人のシェルパが入っていたテントが雪と風で押し流され、百フィートも落下した。幸いにも人間に異状はなかったが、食糧や酸素など多数が失われた。五月二十一日、第四キャンプから一氣に二七二〇フィートへサポート隊とともに西山稜隊アンソールド、ホーベンインの二名は第五キャンプを上げた。テント一張り、ストーブ一個、食糧箱一個が運ばれた。



エヴェレスト付近概念図

五月二十二日、アンソールド（三十六才）とホーベンイン（三十二才）は午前七時第五キャンプを出発した。風もなく、かなり暖かった。出発するとすぐピトンとロープの助けをかりる岩登りとな

プへ撤退してしまつたからである。どうして頂上に達し、東南山稜を下るよりほかなかった。非常に困難な登攀で大部分が四級のグレード、一カ所五級のところがあつた。夕やみせまる午後六時三十分ついに西山稜を登りきり頂上に達した。プロテスタントの神学士の称号を持つアンソールドは教義に反して頂上へ仏教の祈禱旗と十字架を持ってきた。十字架を安置し仏教旗を三週間前ワイテツカーが残した星条旗のアルミのポールに結びつけた。星条旗はすでに烈風に吹きさらされてちぎれかけられていた。頂上には真新しい足跡が残されていて、数時間前サウス・コルからの隊が東南山稜を登ってきたことがわかった。

これより先、二十二日の朝東南山稜の第六キャンプを出発したビショップ（三十才）とジャースタッド（二十六才）の二人は西山稜隊の登頂三時間前の午後三時三十分頂上に立った。時速六十マイルから七十マイルの強風が吹いていたが、眺めはよく、東方にはカンチエンジュンガ、マカルーなどが積雲の上から頭を出し、北方もはるか地平線まで眺められた。写真をとる、四十五分ほど滞在して下山にかかったが酸素が底をつきはじめ、一分間二リットルにさげ、さらに一リットルにしたが南峰の頂上に戻ったときは完全に切れてしまった。下山にかかるとき、ち

ょうど西山稜の隊が頂上近くまで迫っているのを認め、南峰頂上で待ちあわせることにした。アンソールドとホーベンインは暗やみの中に下降をつづけ、南峰付近で二人ともクレバスに落ちこんだりして苦闘しながら両隊コルをかわし午後九時南峰頂上で合流した。ライトがないため第六キャンプまで下れず、二八、七〇〇フィートの高所でテントも寝袋もなくビヴアークすることになった。南峰近くで西山稜隊もまた酸素が切れた。寒気は華氏零下十八度。幸い風はまったくやんだ。もし風がおさまらなかつたら四人とも助からなかつたらうと後でビショップはいつている。

翌五月二十三日サウス・コルへ下り、ここに西山稜から東南山稜への横断という素晴らしい記録が作られたのである。

「ヒマラヤの巨峰の横断は、この数十年間登山者の夢であった。われわれの隊が最初のヒマラヤの横断をとくにエヴェレストで成功したことは、ことにうれしく、誇りに思う。」とデイルンフルト隊長は述べている。

付記、本稿はAP、UPI、ロイター電報よりアレシジしたものである。

●事務室からお願ひ
●会費のご連絡・ご通信にはぜひ
●会員番号をお書き添え下さるようお願いいたします。

／ごやかにつづけられ九時三十分
に閉会した。

第二日外は新雪が降り、しかも粉雪である。なお幸先のよいことに駒ヶ岳がその全姿を現わしていた。こんなめぐまれた条件にはなかなか遇う機会が、地元においても得られなく、屋根をうつ雨の音で心配した昨夜のことは一氣にけし飛んでしまった。

さて、スキーツアーはリフトを特別に運転してもらい登高の時間を短縮し「駒ヶ岳山荘」（標高約一、一五〇メートル）において昼食、大休止をしてから頂上に向う。天候はますます良くなり、写真を撮るのにいい。駒ヶ岳（一六三七、四メートル）の直下まで登り、奥羽山脈の山々を眺め、白皚々たる山懐からスキーを馳せて一氣に下山、全員無事その目的を達しました。

スキーツアーの行動時間

七日「こまぐさ荘」八、四〇—一
一〇「駒ヶ岳山荘」一二、三〇—一
一三、〇〇「駒ヶ岳」一三、三〇—一
四、一五「こまぐさ荘」一五、三〇
解散。

●出席者（敬称略、順不同）

石原憲治、野口末延、村井米子、吉田功、加藤元一、鈴木郭之、関口周也、国分恒次郎、長尾芳男、畠中善哉、荒巻広政、柴田均二、奥山文次、佐藤兼治、高田俊雄

△会費外

大山孝一、有地和夫、須田直治、真崎輝雄、田代宏次、佐々木清一（泉観光課長）、佐藤信義（田沢湖町長）、伊藤金一（田沢湖町観光係長）、平岡三郎（田沢湖町役場）以上（高田俊雄記）

秩父宮記念学術賞

第一回 授賞式

財団法人秩父宮記念会は秩父宮記念学術賞第一回授賞式を、六月一日、午後二時から日本海運俱樂部で行なった。

本会からは横 有恒、松方三郎、日高信六郎、古市美津雄氏が参列した。

式の次第は次の通り

一、開式
二、理事長（日本学術振興会理事長高垣寅次郎博士）挨拶

三、授賞

「ネパール・ヒマラヤの学術調査研究」に対して

生物誌研究会会長

理学博士 芦田 譲治

四、秩父宮妃殿下のおことば

五、祝辞

文部大臣祝辞

秩父宮記念会理事長（前田利男氏）祝辞

六、閉式

◇秩父宮記念学術賞について

財団法人秩父宮記念会は殿下が日本学術振興会総裁として学術振興のことに多くのご功績を残されたことにかんがみ、「秩父宮記念学術賞」を制定し、その実施の一切を日本学術振興会に委託した。

日本学術振興会においては、これを受託し、殿下が生前ご経験とご興味をお持ちになった「山」に関する科学で顕著な成果を挙げたものに對し、人文・社会・自然科学を通じ一年一件に授賞することとし、その候補の推せんを日本山岳会に依頼した。山岳会においては選考の結果、京都大学にある生物誌研究会が昭和二十七年から十八年にかけて行なった。

「ネパール・ヒマラヤにおける学術的調査研究」

に對し、生物誌研究会長芦田譲治博士に授賞するように、日本学術振興会に推せんした。

この調査研究の成果は、当時京都大学教授（現国立遺伝学研究所長）木原 均博士によってまとめられ

Fauna and Flora of Nepal
Himalaya
Land and Crops of Nepal
Himalaya
Peoples of Nepal Himalaya

の三巻に集大成され、文部省の研究結果刊行費の補助を受けて日本学術振興会から出版された。四四ページの報告、写真及び図七九〇、総ページ一、三四四の充実した内容をもち、久しく鎖国政策をとってきたネパール王国を科学的に世界に紹介した最初のものとして各国から高く評価されているものである。（付記参照）

なお秩父宮記念学術賞は賞牌と賞金であるが、朝日新聞社がこれに副賞として賞金を添えることになっている。

◇ 付記 ◇

“Scientific Results of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya 1952-53”

3巻（代表編集者 木原 均）

第1巻 “Fauna and Flora of Nepal Himalaya” (1955年刊行)

本文390ページ、挿図256、序文

木原 均、編集主任 山下孝介、

編集分担 藤岡寛愛、川崎田二郎

中尾佐助、梅津忠夫）

内容＝植物関係4編、動物関係6編

の論文が収録されている。

第2巻 “Land and Crops of Nepal Himalaya” (1956年刊行)

本文529ページ、挿図327、序文

並河 功、編集主任 山下孝介、

編集分担 藤岡寛愛、川崎田二郎

中尾佐助）

内容＝ネパールヒマラヤの栽培植物

の分類学のおよび地理学的記載、農耕

法と農業改良に関する記載などを含む

一九編の論文が収録されている。

第3巻 “Peoples of Nepal Himalaya” (1957年刊行、本文425

ページ、挿図211、序文長尾龍人

編集分担長尾龍人、岩村 忍、藤

岡寛愛、川崎田二郎、中尾佐助）

内容＝網羅的な民族誌の報告である。

従来ネパールヒマラヤの民族誌とチ

ベット民族のそれが空白であったため

好評をうけた。

—カトマンズ便り—

ヒマラヤ蝶蛾調査隊

春 田 俊 二 郎

酷暑のカルカッタから六月六日待望のネパール入国となり、神原夫妻に迎えられてカトマンズ空港に降り立ちました。従来の遠征隊は大抵カルカッタの通関で苦勞し、何日かを空費し、炎天の下で悪戦苦闘するのですが、私共の隊は荷物を全部東京から空輸したためカルカッタで通関せず、ニューデリーに直送され何の問題も無しにアツと思う間にカトマンズに着いて了いました。人間より先に荷物の方がカトマンズに着いて了ったと云うのは前代未聞のことと思います。私共の隊は日本鱗翅学会という蝶と蛾の研究者の集りの学会から派遣された昆虫調査専門の隊ですので、カトマンズに着いた翌日からすぐ採集を始めました。カトマンズ盆地の丘陵（と云っても三千米近い山ですが）に毎日ジープをチャーターして昆虫の採集

を試み、また幼虫の飼育などをやっています。登山隊は毎年各国からネパール・ヒマラヤに集り日本からも幾隊かが入りますが、昆虫だけの専門パーティーは恐らく私達が世界で初めての隊だろうと思いますので大いに張切っています。飼育している幼虫は多分まだ学会で未知の種類ばかりと思われます。カトマンズに着いた翌日、有名なアルピニストのピーター、テイラー氏にばったり銀行で会いましたランタン・ヒマールIIの登頂に成功し下山してきたところで、ダージリンの優秀なシエルバ、パサンプタール三号を伴っていました。六月九日にはエベレスト登頂に成功したディレンファース氏の率いるアメリカ登山隊がカトマンズに帰着、著名なシエルバ三十名余りも集って私達と同じホテル・ロイヤルに宿泊、急に賑かになりました。アメリカ隊は皆んな髭を伸ばし、日焼けして苦悶のあとを物語っていました。よい体格の山男ばかりで、中にはまだ童顔の年少隊員の顔も見えました。

六月十五日に印度大使夫妻主催のエベレスト隊員招待レセプションがあり、私達の昆虫調査隊もこのレセプションに招かれました。日本を出る前にカトマンズに長々滞在された正垣先生（現在はイ★

銀山平の重太郎

藤島 玄

開拓地または開墾地といわれる
畠野や山地に居を構え、一人にな
っても故郷を忘れず、死ぬまで
離れない人に、本年死んだ銀山平
の主の富永重太郎（屋号久衛門）
がある。経済的には多くして得
るところ少ない境遇に身をおき、
その自然の環境を愛するままに孤
独を苦にしない人物は、彼を
最後にして、広い越後の山地に
も、もう求められまい。

重太郎と二人で歩いたのはその
昔大正十四年五月二十三日から
で、枝折峠から越後駒ガ岳を越
し、中ノ岳下幕営、二十四日、中
ノ岳・兎岳・藤原山・剣ガ倉山下
幕営。二十五日、剣ガ倉山・平ガ
岳・白沢山・景鶴山・尾瀬が原・
尾瀬沼長蔵小屋泊。二十六日、彼
は大津岐峠から銀山平へ鉄柄作り
に戻り、私は金精峠を越し日光湯
元温泉金屋泊であった。

長蔵小屋まで全コース雪を踏ん
だが、靴が間にあわず草鞋におそ
ふきをつけ、着ごさる雨具にした
が、設計して作らせた天幕は持つ
て行った。できる限りの重荷を負
担したのも、彼の賃金が予想以上
に高く、大湯温泉東栄館が一円五
十銭の当時、日当四円が痛かった

からよく覚えていた。

さて歩いてみると、一昨日雨の
大湯橋の会見の時から懸念したご
とく途方もない男であった。肩か
ら胸がメリメリ音だてて痛む私な
ど見かえりもせず、自分のピッチ
でどんな急斜面でも一直線にスタ
コラ行ってしまう。枝折峠から先
の峰々は沢から往復はしたが、縦
走は初めてと云うだけに、沢を
指呼するのは詳しいが山は何も知
らないのだ。平ヶ岳へきて、慶応
の学生の話を盛んにやりだし、三
角点標石を担き上げたことなど止
めどもない。話を打切るように先
途の相談にすると、さっぱり返事
もできないのだ。

登高行をみると、大正九年の宮
川久雄・三田幸夫両氏と、十三年
の杉田寧氏外一名を案内して、中
ノ岐川から平ガ岳へ出た当時の自
慢話である。平ガ岳の頂上部の突
起を越後岳・上州岳と教えたのも
彼である。尾瀬が原の徒歩にさん
さん苦労して、長蔵小屋は夜とな
って、長蔵翁に暖く迎えられた。

当時、彼は四十九歳と云って、
一杯お酒が入ると日露戦争に輻重
兵で従軍した手柄話もした。
彼との再会は戦後である。骨投
平に入植し、普通人の二倍もの馬
力で三町歩も開墾し、食糧事情の
悪かった当時に相当に収穫をあげ

て人に羨しがられていた。彼は、
りを、と発音して、野放図もない
冗談を無邪気にぶつ放す。平ガ岳
の下の卵石の下に雷様の卵があっ
て、それを食ったらビリビリとい
レキがきたとか、数の子を栗の種
と間違えて畑へ蒔いたら、棘がポツ
ポツ生えてきた。人より先に大口
あけて笑う人を喰った老翁になっ
ていて、JACの元老達とお馴染
のとおりである。

昨年十二月九日、長岡ハイキン
グのナメコ祭で、渡辺公平理事を
案内して奥只見発電所へ行く車窓
から、彼の正装した姿を見たのが
最後であった。間もない三十一日
に脳出血で床につき、本年の正月
二日にもう亡くなった。当主は富
永竹次郎（新潟県北魚沼郡湯之谷
村下折立）で、孫も五人ある。

八十五歳までよく働き、三田さ
んはじめ旧知にも再会し、銀山平
の変遷も見きわめて、一足飛びの
往生とは、幸せの一生といえよう
(三八、五、二)

▲上高地山荘開設

- ①利用方法、本年度会員登録を山荘管
理人（平林次雄）に提示すること
 - ②同 費用、本会員五〇〇円、会員
外七〇〇円（ただし泊二食付）
 - ③収容人員、寝具備付二〇名位
- 右開合せは本会または、本会信濃
支部（松本市大名町七二）あて。

★インドネシア、カリマンタンから
印度大使に紹介状、お土産を托さ
れて届けておいたためかともかく
公式に招かれました。私達はイン
ドの英字新聞にスタイリス・パ
ーティーと書かれ、全員六名が紺
の制服、蝶ネクタイの姿で出席、い
ろいろの著名な登山家とも交歓し
ました。濃厚そうなディレンファ
ース隊長、あまり愛想気のないコ
ーネル・ワイリー氏（マチャプチ
ャリ初登頂者）その他の方々と名
刺を交換し、横さん三田さんをは
じめ数々の日本の登山家の名が話
題になりました。私達と相前後し
て全岳連九州電々の方々がカトマ
ンズに下山して来られ、神原さん
のお庭のティーパーティーで歓談
しました。私達は六月十七日、カ
トマンズからピラトナガルに飛
びピラトナガル、ダランバザ
ールで必要品の買付をして、六月二
十三日に約四十名のポーターを伴
ってカンチエンジュンガを目指し
てキャラバンを開始します。登頂
が目的でなく純粹の昆虫調査隊で
すので、氷河の末端海拔五二〇〇
米あたりまでしか参りませんが、
二ヶ月間出来る限りの調査を行っ
て、特に日本とヒマラヤの昆虫の
関係や変異の状態などを調べ、こ
の方面での日本の高い研究水準を
示したいと思っております。

シエルパを三人契約し、サーダー
兼クッキングにアン・テンジンを
頼みましたが印度大使夫妻のレセ
プションの際、昨年中尾佐さんの
調査隊のサーダーで東ネパール
に行き、アメリカのエベレスト隊
のセカンド・サーダーをしたシェ
ルパ、チョタレイを見付け同行を
誘った快話してくれましたので
チョタレイを加えて私達の戦力は
倍加しました。

八月末頃、数々の昆虫を携えて
帰国する予定ですが、その前に東
ネパールで数々の蜂に襲われそう
です。皆様によりしく御伝え下さ
い。そしてカトマンズでは神原夫
妻にほんとうに種々お世話になっ
ていることを感謝をこめて書き添
えます。六月十六日付
(折井健一宛)

二二六号訂正(1)

誤

正

「地名と当て字」

4頁1段 着馴れる

着馴れぬ

2段 高所より

高所より

流る、河

流る、河

の義

の義

「アメリカ・エヴェレスト登山

隊との交歓」

5頁1段 カメラそ

カメラそ

の他の機

の他の機

機械

材

アンソエ

アンソルド

ルド氏

氏

一九六三年度

通常会員総会

四月二十日(土)午後二時より
日体協会議室に於て開催。

総会次第

会長挨拶 松方会長

報告事項

一、一九六二年度事業報告

折井理事

二、各支部の報告(支部出席者)

(1) 越後支部 藤島支部長

(2) 秋田支部 保坂隆司氏

(3) 山形支部 村上勝太郎氏

(4) 宮城支部 吉野 禎造氏

(5) 山梨支部 今井友之助氏

(6) 静岡支部 牧野 支部長

(7) 関西支部 山本朋三郎氏

(8) 東京支部 藤田 博氏

三、一九六二年度決算報告

中島理事

四、一九六三年度予算案

中島理事

五、理事改選の件

中島理事

六、監事(一名)改選の件

七、評議員改選の件

閉会の辞 以上 折井理事

各議事については満場一致をも

って可決された。尚、関西支部、

静岡支部より、台湾山岳協会との

親善登山についての報告があった

上高地山荘については運営の不

手際により会員利用者が少なかつたが、今年度は五月下旬に開設の予定がつき会員各位の利用には手続を簡略にして会員証の提示により便宜を計りたい旨の報告があった。

× × ×

(出席者) 横有恒、野口末延、西丸震哉、折井健一、坂倉登喜子、富田美知子、関口周也、安彦六郎

松本熊次郎、高木菊三郎、沼倉寛二郎、野萩守、金坂一郎、尹官炳

松方三郎、相沢裕文、三枝礼子、川上隆、片桐理一郎、佐藤久一朗

今井友之助、日高信六郎、藤田博

児島勘次、松村多四郎、鈴木武七

杉山桂吉、森敦彦、今井雄二、今

井喜美子、錦織保清、浜間透、芳

野越夫、芳野菊子、竹田吉文、鈴

木敦之、冠松次郎、井口正男、岡

村精一、藤島敏男、望月達夫、深

田久弥、網蔵志朗、吉沢一郎、高

橋照、武藤晃、村上勝太郎、山崎

安治、梶本徳次郎、渡辺公平、山

本朋三郎、隈部恵子、吉田竹志、

神谷恭、三田幸夫、吉野禎造、中

島伊平、石原憲治、岩佐吉雄、宇

田川允敏、小野利次、国見利夫、

高橋定昌、佐藤隆太郎、保坂隆司

水野祥太郎、牧野衛、藤島玄、高

橋進、陳光漢、利根川信、以上七

十一名、他は委任出席

× × ×

一九六三年度理事

会長 松方三郎

副会長 三田幸夫

渡辺公平(兼編集一般支部・協会)

折井健一(海外連絡)

山崎安治(調査研究)

辰沼広吉(調査研究)

川上隆(総務企画)

松田雄一(海外連絡)

中島伊平(経理、集金)

深田久弥(図書)

古沢 肇(会報)

木下是雄(調査研究)

金坂一郎(指導)

村木潤次郎(海外登山)

皆川完一(山日記)

梶本徳次郎(指導)

高橋進(指導)

田辺 寿(指導)

竹田吉文(総務集金)

武藤 晃(調査研究)

△監事一名は、野口末延氏を再選した。

× × ×

△評議員は、藤島敏男、神谷恭、

交野武一、小原勝郎、望月達夫

織内信彦(以上常任)日高信六

郎、成瀬岩雄、早川種三、伊藤

秀五郎、今西錦司、今西寿雄、

橋本三八、青木昇、篠田軍治、

藤井運平、入沢文明の各氏は再

任。加藤泰安(常任)吉沢一郎

津田周二、川喜田壮太郎の四氏

を新任。各支部長は前年度の通

りとする。

一九六三年度

東京支部総会

四月二十日午後一時三十分より
体協会議室に於て開催された。

総会次第

一、開会の辞 折井 健一

一、支部長挨拶 石原 憲治

一、一九六二年度事業報告 安彦 六郎

一、一九六二年度決算報告 折井 健一

一、一九六三年度予算案付議 折井 健一

一、役員改選の件 松本熊次郎

一、閉会の辞 折井 健一

尚議事は全議題満場一致可決さ

れた。

△出席者 一九六三年通常会員総

会出席者と同じ。

一九六三年度支部役員

支部長

石原憲治

委員 折井 健一

坂倉登喜子

三枝 礼子

山口 節子

鈴木 郭之

篠原 敏弘

野萩 守

富田美知子

小野 利次

廣谷 精啓

山下 一夫

折井 健一

松本熊次郎

折井 健一

監事 山下 一夫

決算報告・予算は別記の通りで

あります。

△出席者 一九六三年通常会員総

会出席者と同じ。

1963 年度決算報告 日本山岳会東京支部

科 目	37年度予算	37年度決算	摘 要
前年度繰入金	80,550	80,550	
収入部	53,000	70,000	
部会収入		61,052	映画会収益 59,052 ほか
合 計	133,550	214,047	
支出部	47,000	28,988	富士山冬山講習会、親観山行等
事業費	25,000	10,115	
業務費	3,000	0	
材料費	20,000	13,280	写真、スライド
雑費	3,000	260	ザイル等
業務費	1,000	26,440	
雑費	12,000	1,450	
合 計	22,550	59,052	映画会収益
繰入金		74,442	
合 計	133,550	214,047	

支部監事 山下 一夫 沼倉寛二郎

昭和 38 年度 予算

収入部	支出部	事業費	業務費	材料費	雑費
前年度繰入金	74,442	50,000	15,000	5,000	3,000
支部会費	70,000	20,000	2,000	26,000	2,000
		21,442			
	144,442	144,442			

昭和 37 年度収支決算表

37.4.1—38.3.31

科 目	収 入 の 部		予算に対する 決算増減	科 目	支 出 の 部		予算に対する 決算増
	予 算	決 算			予 算	決 算	
経 営 収 入	2,150,000	2,468,100	318,100	事 務 費	880,000	845,819	34,181
入 会 金	150,000	365,500	215,500	俸 給 費	300,000	268,000	32,000
会 費	2,000,000	1,832,700	△ 167,300	文 具 費	30,000	16,680	13,320
旧 会 費		229,500	229,500	印 通 信 費	150,000	75,262	74,738
次 年 度 会 費		40,400	40,400	交 通 費	374,000	462,852	88,852
					26,000	23,025	2,975
事 業 収 益	902,000	1,271,312	369,312	管 理 費	292,000	140,026	151,974
山 岳 広 告 料	200,000	168,000	△ 32,000	火 災 保 險 料	12,000	7,875	4,125
会 報 広 告 料	35,000	47,950	12,950	営 業 諸 税	148,000	5,300	142,700
山 岳 売 上 金	20,000	25,750	5,750	電 光 熱 料	27,000	36,120	9,120
山 日 記 %	500,000	772,377	272,377	電 話 料	35,000	40,461	5,461
会 員 章 売 上		2,850	2,850	電 報 料	70,000	50,270	19,730
貸 室 料	15,000	18,735	3,735	事 業 費	1,880,000	1,760,438	119,562
利 息	100,000	103,218	8,218	会 交 函 費	50,000	54,041	4,041
寄 附 金		1,000	1,000	議 決 費	40,000	16,421	23,579
雑 収 入	32,000	45,090	13,090	書 出 費	120,000	136,755	16,755
預 り 金		74,442	74,442	報 告 費	270,000	347,693	77,693
マ ナ ス ル 売 上		6,900	6,900	山 岳 調 査 費	600,000	834,726	234,726
				山 岳 調 査 費	50,000	54,080	4,080
				山 岳 調 査 費	40,000	24,080	15,920
				山 岳 調 査 費	100,000	39,700	60,300
				山 岳 調 査 費	150,000	116,208	33,792
				山 岳 調 査 費	70,000	70,000	
				山 岳 調 査 費	90,000	32,825	△ 32,825
				山 岳 調 査 費	100,000	33,909	56,091
				山 岳 調 査 費	200,000	100,000	100,000
				山 岳 調 査 費		200,000	200,000
合 計	3,052,000	3,739,412	687,412	合 計	3,052,000	2,746,283	305,717
				剩 余 金		993,120	
						3,739,412	

社団法人日本山岳会、昭和 37 年度収支決算表及財産目録につき監査致しましたところその正確なところを認承致します。

昭和 38 年 3 月 31 日

会計監事 野口 末延 同上 松本熊次郎

財 産 目 録 (38.3.31)		
基 本 財 産	金 額	備 考
貸 付 信 託	100,000	
運 用 財 産	金 額	備 考
建 什 器 備 物 品 書 金 託 託 金 金	1,386,000	含上高地山荘
器 備	250,000	
行 付 預 信 信 託 金	663,000	
銀 行 預 金	1,451,734	
振 替 預 金	1,590,000	
現 金	215,422	
	256,629	
	49,661	
小 計	5,962,446	
合 計	5,962,446	
基 金	金 額	備 考
遭 難 対 策 基 金	64,375	
図 書 室 基 金	11,450	
	113,100	
合 計	188,925	
収 入	山 日 記 % (1963年)	出 費
1,200,000	調 査 費	58,000
印 税 30×40,000 部	集 信 費	313,890
	贈 送 費	9,015
	寄 附 金	27,968
	差 引 残 高	18,750
772,377		427,623

昭和 38 年度収支予算表 (案)			
収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
経 常 収 入	2,230,000	事 務 費	923,000
入 会 金	150,000	俸 給 費	300,000
会 費	2,080,000	文 具 費	30,000
		印 通 信 費	150,000
		交 通 費	26,000
事 業 収 益	932,000	管 理 費	417,000
山 岳 広 告 料	200,000	火 災 保 險 料	12,000
会 報 広 告 料	35,000	営 業 諸 税	7,000
山 日 記 %	530,000	電 光 熱 料	30,000
貸 室 料	15,000	電 話 料	49,000
利 息	100,000	電 報 料	70,000
山 岳 売 上 金	20,000	事 業 費	2,071,000
雑 収 入	32,000	会 交 函 費	50,000
		議 決 費	40,000
		書 出 費	120,000
		報 告 費	270,000
		山 岳 調 査 費	700,000
		山 岳 調 査 費	50,000
		山 岳 調 査 費	40,000
		山 岳 調 査 費	100,000
		山 岳 調 査 費	100,000
		山 岳 調 査 費	70,000
		山 岳 調 査 費	90,000
		山 岳 調 査 費	100,000
		山 岳 調 査 費	341,000
合 計	3,162,000	合 計	3,162,000



淡水猪之吉

図書紹介

にふきわしいとき、たとえば一人旅に出かけるときに、カバンにしのばせて持って行きたい、といったようなことのほうがたのしくもあるようなもので、ちようどそんな気分に近いのではないかと

思うのである。

北海道の旅
串田 孫一著

串田孫一さんは本会員のなかでも、いちばん沢山本を書いた一人だと思われ、今でも盛んにもを書いていて人である。僕は同氏のものを、とくに山に関するものを、たのしく読んで一人だが、本書も実にたのしく、しかもその中に書かれていることには多くの共感も覚える。

たとえば、北海道の見たいところ、行きたいところを、ひとつ残らず見てしまふより、そんなところを残すか残しておきたいというような文章が、この本のどこにかかれていた記憶があるのだが、それは北海道にかぎったことではなく、自分の書架に並んでいる本が、皆読破してしまったものであるということより、まだ読んでない本が何冊かあって、それをよむ

鮮な味をもつ。とくに、一見ゆきあたりばったりとも思える旅のし方が、著者の頭の中では、おそらく極めて熟慮されていたものとい僕はひそかに思うし、またこうした自由気ままな旅のし方ができるという点も、永年の修業と不断の勉強が必要だということが知られる。経験のたりのない人が猿真似をしたら、とたんにヘマをしかすことは明らかだが、本会員にはまさかそんな人もおらぬ筈だから、こういう言葉を加える要はあるまい。

また山登りには実に多くの楽しみ方があり、こうした広い地域を歩くのもそのひとつで、××ルンゼとか××バットレスとかにとりついていくことだけが本当の山登りだということではなく、人間の年令、体力、生活環境などによって自分にふさわしい楽しみ方を見つけたい。僕は日頃思っているのだが、その点でも本書が教える点は必ずしも少なくない。

僕はほぼ三年に近しい月日を札幌で過す機会をもったため、著者が本書のなかで歩いている所は大体知っているが、流石串田さんらしく見事にとらえているのは感心する。北海道に関心をもつ人々には是非一読をすすめたいと思ひ、強いて内容の地域についてはふれない。刊行当時ある書評には、本書には串田さん独特のスケッチがないのが寂しい、というようなことがあったが、僕はむしろ反対である。

串田さんのスケッチは知っている者には既に、すぐそれと判るものだし、自著には必ず自分のスケッチを入れるというのを知恵のないことだ。それを承知の上で著者は敢てひとつも入れず、三宅修君の見事な写真で飾ったものであろう。僕はその方が遥かに賢明であったと思う。

造本、印刷、写真共によい出来だが、装釘は余り従来の串田さんの本らしくなく、正直に云って感心できない。箱の意匠は悪くないが、巻末の地図は親切のようだがごくありふれたもので、なくてもよかったと思う。(望月達夫)

A5版 本文二四〇頁 写真四九葉
附図 一九六二年十二月二十五日筑摩書房発行 八八〇円

越後の山旅

上越沿線の山々

藤島 玄著

案内書といえは通り一べんのそれぞらしいものが多いが、そうしたものとは全く類を異にして、一口にいえば、コクのある案内書である。いうまでもなく著者の永年にわたる山への打ちこみかたが、ここに底光りしてうかがわれるのである。

昨年の夏、飯豊の山開きに招かれて、著者のお伴をして歩いた折のこと、あの起伏の多い胎内尾根のぼつこりの一つ一つをたねんに手帳へノートし、その所要時間や高度差などをくわしくして



カット・佐藤久一朗

五月理事・評議員会

九日・ルーム

△出席者松方会長、渡辺副会長、理事折井、辰沼、山崎、金坂、深田、武藤、高橋、皆川、松田、竹田、中島、評議員日高、藤島、神谷、加藤、青木、吉沢、織内、交野、津田、三井山梨支部長 石原東京支部長

△議事と報告

①理事の事務分掌

・常務理事 折井 (総務企画、海外連絡)、山崎 (指導、遭難対策) 辰沼 (調査研究、医療)、川上 (総務、企画)、中島 (経理、集金)、松田 (海外連絡)

・理事 深田 (図書)、古沢 (会報)、木下 (調査、研究)、金坂 (指導)、村木 (海外登山)、皆川 (山日記)、梶本 (指導)、高橋、竹田 (総務、集金)

②評議員

・常任評議員 藤島、神谷、交野 小原、織内、加藤、望月 (山岳) ③山岳協会の担当 渡辺、交野、小原

④体協評議員 入沢

いた著者の人知れない苦心のあとがこうした案内書に十分に反映してくるものと思う。

本書は、下越、中越、上越にわたる三部作の一部で、守門、浅草岳、鬼が面山、越後三山、銀山平尾瀬、荒沢岳、未丈ガ岳、金城山巻機連嶺、苗場山塊、清津峽、鳥甲山、岩菅山、谷川連峰のくわしい案内がしるされている。この地方の案内書の決定版といえるであろう。とくに越後三山、八海山、中ノ岳、駒ガ岳については約四十ページにわたるくわしく各ルートが述べられている。古文獻から説きおこしたそれぞれの山の由来なども、本書の一つの特色といえよう。

(山崎安治)

昭和三十八年四月十五日富士波出版
社発行、写真多数、高低表略図付、
二二八頁、定価二〇〇円。

登山の会話について

前号(二二六号)のこの欄で山崎安治氏が紹介された藤木高嶺氏著「インディオの秘境」を読んで、登山の会話について考えた。

一行は関西学院大学山岳会の方々であるから、日常の会話が「上方弁」であるのは当然のことながら、報告書の中であらためて活字になったのを読むとなにか特別な感じが受取れる。これは東京アクセントの圏内で暮しているものだけの感じ方であろうか。

例えば、一九六一年六月九日、ワスカラン南峰に登る藤木・西村隊員が巨大なクレバスを前にしての会話、「よっしゃ、藤木さん、たのんまつせ(八

四頁)とある。頭痛、鼻血、呼吸困難に喘ぎつつ登っている熱帯の水山での会話である。頂上へ近づいて、「藤木さん、どうぞお先に、頂上じゃおまへんか(八八頁)、下山のときヘッドランプを頼りに危いスノーブリッジをとび越えるときも、「いきまつせ」と西村君は小走りになった(九四頁)とある。そのほか六月十一日、再びワスカラン南峰の登頂で、田中・小川隊員が、田中「男なら飛びおろし」「そんならおりまつせ」九七頁、「こっちはいけそうでまつせ」(九八頁)とある。これが下山のときクレバスに五メートルも宙つりになるような山での会話である。

これらの会話を関西の方々を意識して使っているのはなく自然に話しているのだが、となく突極食になりがちな山での会話に、上方ことばは意外な効果を添えているようだ。

山、一特に高い山で人の感情や思考力がどんな変化をするものか知らない。ただわずかに経験されることは、ひどく感情的になったり、口をきくのも面倒になったり、自分ではと驚くほど乱暴な口をきいたりすることがあるものだ。このことが仲間の気分を損うことは言うま

でもない。
むかしスキー場が閑散であったころ、関西の人たちが来ているとすぐわかったものだ。一種賑やかな調子が、雪の中でも宿屋でも耳について、ときには冗舌に感じられてうるさながらもしたものである。
しかし比較的に無口で、ぶっきら棒な関東の人たちの話す一本調子な東国なまりには、さまざまな感情を豊かに包み込む柔軟性がない。とかく怒鳴りつけるような調子になってしまふ。
むろんはじめに例にあげたような会話は、活字で読んだだけであるからイ

ントネーションなどについてはわからない。漫才で聞くような調子ではなく、真剣な切迫した調子であったかもしれない。
しかし、ことばが先きか人が先きかは別問題としても、上方ことばのもつニュアンスには長い遠征に耐えぬくのに必要な条件が自然にそなわっているように思われる。
いったい登山紀行では会話は重要に扱われていない。必要なことばをこくわずか、それともたいてい標準語ですましている。そのため本書を読んで以上しることに気がついた次第。妄言おゆるし下さい。(F)

Books & Journals arrived recently

(近着洋書紹介)

Books

- Aita Montaña Normas; Federación Española de Montanismo, 1960
Aconcagua; Ana Touner de Severino, 1953
Zauber der Hohen Tatra; Kazimierz Sayss-Tobiczyk, 1956
Lure of Everest; B.G. Singh, 1961
Kampf um den Himalaja; P. Bauer, 1952
Nepal: 1960-1961; Baral, I. 1960
Last of the Annapurnas; M.S. Kohli, 1962
The Mountain World; R. McNally, 1962
Entre Terre et Ciel; G. Rébuffat, 1962
100 Jahre Österreichischer Alpenverein, 1862-1962; M. Hanke, 1962
Jahrbuch des Deutschen Alpenvereins; Deutscher Alpenverein, 1960 u. '61
Alpen bilder aus 150 Jahren; Künstlerhaus, Wien, 1962
Au Dela de la Verticale; G. Livanos, 1958

Journals

- De Berggids; Jan.-Nov, 1961, Nederlandse Alpen-Vereining
De Berggids; Sep.-Nov, 1962, Nederlandse Alpen-Vereining
Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins; April-Sept., 1962,
La Montagne et Alpinisme; Jun.-Oct., 1962 ClubAlpin Français
Rivista Mensile; Apl.-Ott., 1962 Club Alpina Italiano
Apparachia; Jun.-Dec., 1962, Apparachian Mountain Club
Apparachia, Bulletin; 1961-1963, Apparachian Mountain Club
Harvard Mountaineering; May, 1961, Harvard Mountaineering Club
The New Zealand Alpine Journal; 1962, New Zealand Alpine Club
Himalaya-Chronik; 1957-1961, G.O. Dyhrenfurth.
Österreichische Alpenzeitung; Juli.-Aug., 1962, Österreichischer Alpen Klub
The Journal of the Mountain Club of South Africa; 1961, The Mountain Club of South Africa
The American Alpine Journal; 1962, American Alpine Club
Club Alpín Belge; Jan.-Oct. 1962, Club Alpine Belge.
Jugend am Berg; Sep. 1962, (係、小谷津、鈴木郭)

- ⑤ エベレスト登山計画について
・ 印度、ネパール出張中の三田副会長より連絡あり、一九六四年はドイツ、一九六五年は印度に登山許可済みのため一九六六年の許可を取付ける予定。
- ⑥ テンジン山来日中止について
・ 日本外務省で招待交渉中とのことろ病気のため中止となった。
- ⑦ アメリカ隊のエベレスト登頂に祝電を打電した。
- ⑧ 登山技術研究会について
・ 月山に於て四月二十七・三十日開催された。
- ⑨ フランス山岳会より招待
・ 恒例のフランス山岳会主催シャモニー登山学校講習会(七月十七日・八月三日)の招待あり、適当な希望者あれば六月一日までに申込みたい。
- ⑩ 上高地山荘の件
・ 今冬豪雪のため便所一部崩壊修理手配中、管理人平林次男を依頼した。
- ⑪ 共和運動具製作所「遭難救助用具国産化」につき推奨依頼について
・ 本会に於て使用してみることとする。
- ⑫ 関西支部総会について
・ 五月十四日開催につき、一名出席要請あり、吉沢評議員出席とする。



茨木猪之吉

会員通信

五月の羅臼岳

望月 達夫

札幌の勤務も丸三年に近くなったので、そろそろ転勤の発令もあらうかと、五月二十五日(土)の夜行で知床半島の羅臼岳へ向う。同行は会員高沢光雄君と、同じ勤め先の吉野恒夫君。

網走で乗替え斜里で下車すると折しも朝の光をうけた斜里岳と遠く知床の山々が、五月晴れの青い空を背に遊志をそそる。

便利になったバスのおかげでウトロのさきの岩尾別で下車したのは丁度正午。羅臼岳から硫黄山へかけての山々が、目の前に望まれる。四キロ奥の岩尾別温泉には大きな旅館が建築中で、これも既に人間臭が強くなっていた。

二十七日、昨日余り晴れすぎたせいか、早晩は薄雲が空一面はび

こつて、どうやら天候の悪化を思わせる。早いこしたことはないので午後四時に岩尾別温泉を発した。五時二〇分弥三吉水、その手前から残雪の上を歩き、以後

稜線までずっと雪の上を歩いた。六時三〇分、羅臼平をま近く望む地点で、折から朝日が雲間をもれ、オホーツク海方面の眺めも一段とすぐれてきたので、ゆっくり休息をとった。羅臼平の木下弥三吉氏の記念碑(会員佐藤久一朗氏作)をたずね、周囲の偃松のけがれなき緑を賞し、遙かに国後島のチャチャスプリを望み、一段登って望峰台に荷をおいた。この付近からは三峰山、サシルイ岳、オツカバケ岳から更に硫黄山への眺望が素晴らしい。

羅臼の頂上へ達したのは九時。僕は幸い晴れてきた空のもと、さえぎるものない展望と誰れ一人他にひといいない静けさに恵まれその好運に感謝した。西南には遠根別、海別、斜里の山々が、また羅臼湖が望まれ、羅臼の町がそれと指呼できた。

望峰台に戻りゆっくり休んで弁当をたべた。そこから直接羅臼側の大雪山を僅か二〇分で屏風岩まで下り、泊り場小舎が十一時。その辺からボツボツ雪が断続しはじめた。沢通しの路が左手の山側をまきはじめる付近は再び残雪で、遂に路を失い沢を下り過ぎたことに気づいたので、左手の斜面を高度百メートルほど登ってみたら雪の消えた処で案の状路を見出すことができた。羅臼温泉着二時十分。

翌二十八日、風は強いが今日も晴天。知床別の先きまで海岸風景を見物するためにバスにのった。天狗岩、対岸の国後島、雪を多く残した知床岳、僕は五月の陽をあびたそれらの自然をあかず眺めた。

千島の思い出

水野 公男

丁度今から二十年前、千島での

生活の中で一番長く今なお懐かしい思い出が残って居るのが得撫島(トモヌシ)である。島は東西が一二〇軒、南北四〇軒と言う小さな島で有るが、これでも千島列島中で四番目に大きい島で有る。

満洲から移動して来た私達の間には、千島特有と言われる海岸より一〇〇米も切り立った岩壁の上に置かれた様な島の姿を見て奇異の眼差しを向けたものでした。

中央部には尖鋭な山々が白雪を戴き、山麓一帯から平地にかけて岳樺と道松の緑がとても美しく、海岸付近から平地にかけては高湿原が沢山有り、誰かがつぶやいていた「この島が東京近くに有ったら」と言う言葉が忘れられない。

千島は一年を通じて一日中晴れて居た日が十八日しかなかった程の処で、冬は来る日も来る日も吹雪と豪雪で雪かきは毎日の仕事の一つでした。山や峠には大雪庇が張出して糧秣運搬、郵便受領での山越えは苦しいものでした。海岸の結氷が流水となり海一面流れ出しやがて流水が消えると春のおとずれも近いと楽しみにして居たものであり、雪の中から野草の芽が出て来たのを摘みでは料理して食べた。小川を溯って産卵に来る鮭、鱒は川にあふれその壮観な事、面白い様に獲れるのでつい後でどうして運んだらよいだろうかと考へる有様、又航空隊で鯨を潜

六月理事・評議員会

六日・ルーム

出席者

松方会長、三田、渡辺副会長

理事 深田、折井、山崎、古沢、松田、皆川、辰沼、中島、武藤、高橋

監事 野口、松本

評議員 日高、藤島、川喜田、神谷、入沢、小原、吉沢、交野、織内

東京支部 石原、関口、鈴木

▽議事並びに報告

①山日記編集について

・印刷業界の状況により本年は早目に原稿整理の必要あり、東北地方に主力をおいて資料の収集につとめている。

②ルーム使用料について

・従来十名迄一五〇円が一名増す毎に十五円とあるを、一件三〇〇円とする。

一般個人会員のためにゆくりり本も読める日を決めたい。使用規則を改めて作成すること。

③山岳協会役員について

・本会より新役員として左記各氏を推薦する。

松方三郎(副会長) 渡辺公平(専務理事)

入沢文明、交野武一、山崎安治、小島六郎、後藤幹次、藤島源太郎、三井松男、高山忠四朗

水野祥太郎、末松大助(以上理事)

水艦とまちがえて爆弾投下して気がつくと言う滑稽さもしばしばあった。秋田路の茎は食料にと取りに行ったが俄雨で葉を傘がわりにして逃げ帰って来たものでした。夏は濃霧の毎日です。寒くその為か島全体は高山植物に包まれ私達の目を楽しませてくれた。七月になると千島桜と云うのか山桜が咲き始め、故郷の桜をしのびました。

谷間や山蔭などには残雪が多く残雪が消えて一ヶ月もすると新雪がやって来るのです。海には鯨と共に時々やって来るとトドを退治する為に銃声がこだまし、驚いた海猫が何万匹も飛び立つその声にかえって私達が驚かされたものでした。浪打ちから五〇米も打上げられた昆布の量や、海底一面に見えるウニ、餌もつけずに釣り上げる面白さ、越冬の苦しさ、風景や植物の美しさ、見事さ、海猫やアザラシを追いかけたりした思い出の数々は今はソヴェト領土として遠く目のとかない彼方に消えてしまったが、私は今一度訪ねて見たいと思いつけている。

(三八、六、一)

台湾 便り

中華民國台灣省山岳協會

余 初 雄

しばらくですが、皆様にはお変わりございませんか。

去年そちらでお世話になってからももう早くも一年、一緒に連れて行っていただきました吹雪の槍ヶ岳がとてなつかしみます。

その後、続々と日本隊がこちらに登山に参られますが、まだまだ山は静かで、あなたや正子様の御来台を心からお待ちしています。ここにその統計を作りましたので、この次の方の御参考迄に、貴JAC会報の一隅にでものせて頂ければ幸いです。

私は勤務が港務局ですので、これらのチームが基隆上陸には通関手続にいつもつききりで、又全部の歓迎会には参加しております。

去る二月、約二十日間、関西支部と老濃溪の湖溪で七度目の玉山(新高山)に登りました。苦しい山行でしたが、もう楽しい所しか思い出せません。同支部のこの登山記が「山と溪谷」に出るとのことですので御覧下さい。

こちらに來られる隊は全部が素晴らしいです。

台湾の登山は、大山を短期日に登るラッシュ・タクトイックなので、ほとんど山胞を使い、自らあまり荷物を背負いませんので、日本チームの各人が持つ荷物量には驚きました。

隊員のエチケット、ユーモア、センス、言葉使いの丁寧なこと、登山技術、ファイト、計画、組織、山をきれいにする心がけ等

総てが勉強になります。

尚、登山とは別に、先月、早大の学生がいすゞの新車ベレルで台湾一周親善旅行に來台しました。これは山岳協会が招聘単位でないで、その人数、日数(五月十日、折井健一あて)

スケジュール等不明です。どうぞ皆様もおいで下さいませんか。

台北市華陰街九三

余 初 雄

戦後日本チームの台湾登山統計

1963. 5月現在

来台、月日	帰国日	在台日数	チーム名称	隊長	人数	登山地
1959 1960	26/10	19/ 1	86	JAC	西丸震哉	1 T-S. N-C. K. U. ⑧
1962	28/ 7	24/ 8	28	同志社大、W.V.	中川雍一	6 U. ⑧
	4/ 8	9/ 9	37	秋田大、山岳部	七里直	3 T-S. U
	9/11	3/12	25	早稲田大、W.V.	渡辺栄太郎	12 T. ⑧
1963	22/ 1	2/ 3	40	JAC、静岡支部	山本朋三郎	7 T. U. ⑧
	10/ 2	25/ 3	44	JAC、関西支部	藤田博	10 U. ⑧
	3/ 3	16/ 3	14	同志社、讃岐会	奥西皓二	6 S
	9/ 3	31/ 3	22	神戸大、山岳部	田中薫	9 U. ⑧
	20/ 3	4/ 4	15	慶応大、医、山岳部	辰沼広吉	10 S
	20/ 3	24/ 4	35	日本大、山岳部	瀬能重衛	11 T-S. N-C. U. ⑧

附註：登山地名T大霸尖山、S雪山、N南湖大山、C中央尖山、K奇萊主山、U、玉山、⑧台湾一周、⑨東部半周、⑩西部半周

計 10 チーム

75 人

(台湾省山岳協会 余 初 雄 記)

- 小原勝郎(監事)
- ④海外登山について
- ・三田副会長より訪ネパールの報告あり、エベレストは一九六六年として登山許可を取付けた。
- ⑤台湾山岳協会より訪日登山隊派遣のこと。
- ・今年十月、十一月に登山隊を派遣した旨連絡あり招聘決定する
- ⑥第十七回ウェストン祭について
- ・六月一日、二日、上高地において開催、仙台から平沢、関西から藤木、津田、中原、二木、東京から渡辺副会長、田中薫他多数会員が参加した。
- ⑦大学山岳部について
- ・文部省で取付けた各大学山岳部アンケートにより実態調査を整理している。
- ⑧山林美術展後援について
- ・六月十八日、二十三日、池袋三越に開催、例年通り後援を決定す
- ⑨神河内山荘運営委員について
- ・本年は運営委員を決定してはどうかとの意あり、左記に委員を依頼する。
- 高山忠四朗、小里頼忠、百瀬一茂、村上守、中島伊平、関周也、折井健一。
- 尚、管理人平林次雄夫妻が既に在住して会員の世話をする。使用料会員五〇〇円、ゲスト七〇〇円二食付とする。
- 以上

東海支部報告

(A)昭和三十八年度総会

さる五月十二日午後、名古屋市中区鉄砲町岡谷鋼機株式会社会議室にて昭和三十八年度東海支部総会を開催し、次の事項を附議可決した。

(1)昭和三十七年度事業及び会計報告

(2)昭和三十八年度事業計画及び予算

(3)役員改選

(4)西穂高登山ケーブル設置に関する件

(1)昭和三十七年度では会員藤森元夫氏の尽力によりルートを確得でき、毎月定例集會を持てるようになったこと、その他ヒマラヤ登山報告会二回、山日記編輯の協力遭難救助に対する募金三件、親睦会二回等があげられる。

(2)本年度事業計画では、東海支部も三年目を迎え、支部会報創刊号の発行及び現地小集會を当支部範囲内にて行ない、他支部の会員とも交流したいこと、今回朝日新聞社が名古屋に朝日文化センターの名のもとに各種講座を持つ計画でその中の登山教室を東海支部が担当することになったこと等が主な事業計画であるが、いづれにしろ本部及び会員の協力を御願ひせ

ねばならないと思っている。

(3)昭和三十八年度役員 支部長 須賀太郎、副支部長石岡繁雄、常務委員中世古隆司、石原国利、藤森元夫、会計大口瑛司、委員原真加藤幸彦、沖允人、会計監査高橋達雄

(4)伊達忠雄氏より、最近の新聞紙上で西穂高飛騨側にケーブルを設置すると報ぜられていたが、西穂高は冬山初級者の最良のゲレンデであり、そこを失うことは登山界の重大な損失であるとの発言があった。西穂高の飛騨側は東海支部の地域内でもあり、今後の成行きによつては支部も何らかの具体的な行動に出るべきであるとの結論に達した。

(出席者) 大口瑛司、村上明、落合八重子、神谷真吾、村井喜一、石岡繁雄、須賀太郎、伊達忠雄、木村哲夫、鈴木重彦、原真、藤森元夫、高橋達雄、石原国利、加藤幸彦、中世古隆司、大呂公徳、沖允人、塩田良伸、その他会員外四名

(B)支部会員について

現在東海三県在住会員は約八十八名、内当支部へ正式に入会されている者は五月十二日現在六十三名であり、各種行事に参加しているそこで東海三県在住会員にて支部未加入者で入会希望者は、名古屋

市千種区高見町五の三九、日本山岳会東海支部宛御一報下さい。

(C)集會について

現在東海支部では名古屋市中区御幸本町三の十一、有限会社水谷商店内ルームにて毎月第二土曜午後六時半から定例集會を行ない、十名乃至二十名の会員が常時出席している。また第四土曜には委員会を開いていきますから、支部員外の会員も気軽に出席して下さい。

(中世古隆司記)

関西支部報告

関西支部では六月十九日、三十八年度委員の初会合を行い、分担業務を決めた。

マ三十八年度役員事務分担

支部長 水野祥太郎
常任委員 今西寿雄、津田康祐、水野政博、梶本徳次郎

阿部和行
阿部和行、水野政博

計 岡田博司、水野政博
支部報 川口善三、寺本 混

本部会報 梶本徳次郎、松丸秀夫
大木保太郎

文書図書 野村哲也、阿部和行、穴戸 元

学生部 岸田権二、伴 明、住吉仙也、寺本 混、西川元夫、田淵邦彦

岳連関係 大賀寿二、藤田 博、阿部和行、藤田 博、研究會

西岡京治

小集會 水野政博、岸田権二、鈴木良彦

監 事 仲西政一郎、二木信次

◇関西支部 学校山岳部の遭難対策協議

五月二十七日、大阪毎日新聞社に於て学校山岳部の遭難対策について協議した。

▽出席者

水野(阪大)、中尾(大阪府立大)吉良(大阪府立大)、川村(関西学院、田中(神戸大)、松丸(東大OB)、住吉(阪大OB)、津田(同志社OB)、松島(文部省体育局スポーツ課長)

☆出発ごあいさつ

此度同志社大学ヒマラヤ遠征委員会が企画いたしました西北ネパール・サイバル峰遠征に際しまして多大の御支援を賜り厚く御礼申し上げます。御陰謀で七月十日神戸港出帆ボンベに向うことになりました。今後とも宜しく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。

昭和三十八年七月

同志社大学ヒマラヤ遠征委員会

委員長 長上 野直蔵

委員 山岳部長 吉川 貫二

同志社大学 山岳会会長 戒 武

同志社大学ヒマラヤ遠征隊

隊長 長 児島 勘次

副隊長 長 平林 克敏

岡田啓二

松村多四郎

佐藤和男

岡田啓二

昭和三十七年度

登山技術研究会

主催 日本山岳協会
担当 社団法人日本山岳会

①期日 昭和38年4月27日～30日

②場所 月山(山形県西村山郡西川町志津、布袋屋)

③装備その他 スキー・ツアーに必要な個人装備

・食糧品 嗜好品のほかは現地で用意する。

④行動日程 4月27日 開会式(志津、布袋屋) 挨拶 成瀬岩雄

研究会の主旨 村木潤次郎

◎研究会 高所における酸素の人体に及ぼす影響

4月28日 志津 月山頂上 司会 辰沼広吉

◎研究会 最近の海外登山について

4月29日 水河雪崩について 榎 有恒

◎研究会 八千米峰のタクティクス

4月30日 山形駅前解散

◎参加者 本部 村木潤次郎、川上隆、片桐理一郎、松田雄一、高橋進、山野井武夫

隊の組み方 松田 雄一

高所装備について 加藤 泰安

無線関係 村木潤次郎

無縁関係 芳野 利夫

4月30日 山形駅前解散

東京支部集会ご案内
 ☆ビール・パーティ
 ▼八月二十一日(第三水曜日)
 マルーム
 ▼会費六百円
 八月の三水会は恒例のビール・パーティとしました。多数お集りをお待ちします。

・相沢裕文、石坂昭二郎、大塚博美、大島正芳、岡本丈夫、小方金弘、加藤泰安、金坂一郎、熊谷義信、齊藤惇生、佐伯富男、佐藤久一朗、住吉仙也、竹節作太、辰沼広吉、津田康祐、中沢公正、中村保、成瀬岩雄、橋本誠二、浜野吉生、平井一正、平林克敏、広谷光一郎、尾藤昭二、堀田弥一、横有恒、宮下秀樹、宮原巍、山崎安治、山本健一郎、吉川尚郎、渡辺公平、北村泰一、芳野超夫
 ・地元後藤幹次、後藤恵次、梅津、真田、志田の各氏。

二二六号訂正(2)

誤 正

「再び世界の最高峯について」

7頁2段 こうい算 術の方が

「ネパール便り」

12頁2段 一九二四年 一九二四年

13頁1段 今カトマンズで支部長

部長は

昭和三十八年六月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円

電話神田(四)八九五二番

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂